


 ずいそう

雑感—技術と趣味の狭間で

稲富 祥一郎



会社に入って35年近く技術畑に生きてきましたが、この頃時々思うのは、自分は一体何時頃から技術に興味を持ち始めたのだろうか、自分の技術の原点は何だろうかという事です。はっきりと技術者になろうと意識したのは小学校5年生くらいだったような気がします。親父がやはり技術屋で、私が子供の頃、親父が半田ゴテを握り、家の真空管式ラジオを作っていたりしていたのを見ていましたのでその影響が大きかったように思えます。盛んに湯気を上げる薬缶を見て、漠然と水を温めると何故湯気になるのかとか、蒸気機関車の車輪は何故あんなに巧く回るのだろうかとか、田圃の畦道で用水ポンプを動かす単気筒エンジンのプッシュロッドの動きやフライホイールに巻き付けられたベルトが波打ちながら回っていくのを飽きずに眺めていたり、天井から下りてくるベルトに繋がれた旋盤が鉄を削っていく様子を見て何で鉄がこんなに切れるのと工員さんに聞いたり、港を出る漁船の焼き玉エンジンを始動するとき煙突から出る煙がドーナツ型になるのは何故だろうと考えたりした事が思い出されます。又模型屋さんが結構あちらこちらにあり、そこでブザーやモータやラジオのパーツを買ってきては自分で組み立てて物を作る楽しみを知ったりしたものです。ある意味で田園風景と、当時の、メカがむき出しの機械や電気製品が共存する世界、それらを、模型を通じて自分で考える、そう言った環境で生活していた事が、自分が意識しない迄も道具や機械や電気に興味を抱く原点になっているような気がするのです。昨今、物作りへの興味が特に若い方に薄れてきているとか、団塊の世代の大量定年を間近に控え技術の伝承をどうするかと言った事が盛んに言われていますが、どうも基本は生活の中に技術が見えなくなっている、物があまりにも進化しすぎて原理が見えなくなっていることがその遠因のような気がいたします。

私は、縁あって建設機械製造会社に入り油圧、車体、エレクトロニクスの開発に携わってきましたが、この開発の途上では多くの方々とお付き合い、触れ合いがありました。そこで教わったのは技術へのつきない興味と幅広い物の見方をされる方が世の中にはごまんといるという事でした。そう言った方もやはり私に似たような子供の頃の体験を持っておられる方が多いよ

うに思えます。

会社に入りますと毎日が全てと言っていい程技術の世界で、それも答えがあるかどうか分からない問題に常に直面し、それを解決していく事が仕事という事です。私のような性格の人間は疲れてくる事もあります。そのような時にリカバーする薬が原体験であり、それを基にした趣味なのです。趣味と言えば海釣り、オーディオアンプ作り、模型作り、写真、料理（特に和食）、ゴルフ、洋蘭栽培、木工、書道、音楽鑑賞、ドライブ等枚挙に暇がありませんが、例えば釣りを基にして、ホイール式クレーンを開発していた時はブームの調子と竿の調子を比較しどのような調子が扱い易いかと言った事をよく考えたものでした。此の調子というのは非常に大切な事でゴルフクラブのシャフトにも当てはまります。感性工学との接点と言っても良いでしょう。料理は素材が違うだけで完全に創造の産物です。素材を削ったり、切ったりして見た目にも食べやすい物を創るのは、物作りの視点には欠かせない事のように思えます。書は筆を落とすときの緊張感が、図面に先ず中心線を引くときの緊張感と通じます。写真は構図を考えながら撮る時バランス感覚が大切ですが、これは美しい製品、バランスの取れた設計と言う視点から非常に重要な要素と考えられます。

何とも散文的な内容になってしまいましたが、技術は全ての趣味に通じ、趣味は全ての技術に通じる。その根幹はやはり普遍的な物であり、子供の頃の原体験が大変強く影響したのではないかと思います。

今日も会社へ行く道すがら、路傍に咲くカタバミの黄色い小さな花を見つけました。可憐さと共に、人が振り返って見る事が無くてもきちんと生きていく逞しさを感じました。

物作りに携わっておられる方々も又、誰に見られなくとも良い物を生み出す努力を日々続けておられる訳ですが、忙中閑有りの気持ちを持ち、自己鍛錬を趣味を生かしながら続けていく事が、自分自身のゆとりと物作りのゆとりを生む事に繋がるのではないかと思う今日この頃です。

—いなとみ しょういちろう 株式会社小松製作所
建機エレクトロニクス事業部副事業部長—